

論文

スポーツによる被災地支援活動と 共生コミュニティ創生 ～能登町ボッチャ大会の事例報告～

宮崎 純一

キーワード

スポーツ
被災地復興支援
ボランティア活動

目次

- はじめに
 - 被災地復興支援としての「能登町ボッチャ大会」
 - d4g ボランティア部の活動
 - 共生社会形成とスポーツの果たす役割についての
先行研究
 - 被災地支援とスポーツを介した組織運営の事例
 - 青山学院大学のスポーツによる被災地支援活動の
取り組みと学び
 - まとめ
- 謝辞
参考文献

1 はじめに

本研究は被災地の仮設住宅で暮らす高齢者を中心とする能登町民に向け開催されたユニバーサルスポーツ「ポッチャ」の体験会と競技会「能登町ポッチャ大会」（2025年7月～10月）を対象として共生社会創生への有用性を考察する。コミュニティを基盤とした日常において、対面での交流はウェルビーイング獲得に有用¹⁷⁾な活動である。なかでも、多様な年齢層において心身の健康を獲得し、少子高齢化社会に備えるスポーツ活動には親和性を有することが報告⁵⁾されている。さらに、実りある共生コミュニティの形成には、スポーツ体験を通じて「機会」創出という種を蒔き、時を経て「継続」することにより根を張り、芽吹かせることが必要となろう。

主催団体である「d4g ボランティア部」（以下、d4g ボ部 と記す）は、2024年1月の能登半島地震発生直後から支援活動を開始している。その後、2025年3月には現地を訪れ視察とスポーツによる被災地支援に着手した。7月からは能登町の仮設住宅や集会所を巡り、合計10か所でポッチャ体験会を実施した。10月には、その集大成として訪問した能登町内の各地域から参加チームを募り、多くのボランティアの協力のもと大会を開催した。参加した12チームは高齢者で構成されたチームだけではなく、地元自治体職員や児童クラブの子供たちと保護者、ブラインドサッカーのアスリートも加わり一様に競技を楽しんだ。大会では競技だけに留まらず、レクリエーションや東日本大震災時の恩返しにと、山形などから駆けつけたボランティアによる芋煮などの食事会も実施された。筆者は本学「スポーツマネジメントキャリア演習」の受講生と共に対象活動の運営スタッフとして同行し、視察、資料収集を実施した。

スポーツによる「人の繋がり」を、社会課題解決に応用する取り組みは各地で実践され始めている。このような取り組みを継続していくことは今後の課題であり、多くの若者たちが活動に理解を示し、未来に向け牽引してくれることを願って止まない。そして、それこそが本研究の到達点でもある。

2 被災地復興支援としての「能登町ポッチャ大会」

2-1 開催経緯

能登町ポッチャ大会は d4g ボ部と公益社団法人青年海外協力協会（以下、JOCA）が共催し多くの個人、団体の協力のもと開催されることとなった。加えて、一般社団法人 OPEN JAPAN（以下 OJ）、一般社団法人新村新友会などの非営利法人、ボランティアサークルチーム G、ちょんまげ隊、STRANDER など任意団体の有志による運営サポートは、意義ある大会に向け欠かせないサポートとなった。当日は、ちょんまげ隊の角田寛和氏（以下角田氏）の企画によりお昼ご飯のテーブルを参加者、運営スタッフで共に囲む機会を持つことが出来

た。そのため山形、宮城から「芋煮鍋対決」を実施すべく、東北被災地支援での繋がりのあるサポート隊も駆けつけた。地元からは能登高校魅力化プロジェクトを推進する木村聡氏(以下、木村氏)、能登高校の教員、生徒たち、神奈川県から参加した中学生と保護者、青山学院大学の学生が支援に参加した。特別ゲストとしてブラインドサッカーのアスリートもサポート役のパートナーと共に長野県から大会参加した。

このように多くのスタッフを迎え実施することとなった大会の開催経緯を、d4g ボ部の部長であり今大会の大会委員長、審判委員長を務めた山口剛氏(以下、山口氏)の記したアンケート回答を参照し考察する。2024年1月に発生した奥能登震災に対して、山口氏は迅速に有益な情報を社員に届けたいとd4g ボ部の活動の一環として、能登支援のニュースレター(2024年1月9日に初回配信、現在 vol.19)を発行した。「それまでの部活動は、社員の活動を紹介するオンラインによるサロンや対面イベントを実施しながら『交流プラットフォーム』を目指していた。」としながら、「会社の動きは待ってられないと、ちまたに散乱している情報ではなく、社員仲間が選りすぐった現地やボランティア関連情報を届け、信頼できる情報源として役立ててもらうことを狙いとした。」その結果、社内外でさまざまな能登支援活動が始まったという。今回の大会にも関わっていた能登高校の留学支援活動に取り組む木村氏からの情報提供などにより「ボランティア部として、自ら現地に行って、住民のためになることをしたいと考えるようになった。能登の惨状を知るにつけて、自分達で動きたいという想いが強くなった。」と具体的な活動に移行する経緯を語った。

当時、電通スポーツ局(スポーツビジネスソリューション局)に所属し、パラスポーツを管轄していた山口氏は被災地支援に関しても、「心や体の健康を維持するためにスポーツで貢献したい。」と考えたという。避難所生活や仮設住宅での生活課題を下記のように想定した。

- ・運動不足、ストレス発散出来にくい環境下での日常である。
- ・運動やスポーツをする際の十分なスペースがない場合もあり得る。
- ・居住者には高齢者が多く、激しい運動は難しい。
- ・新しいスポーツはルールが難しく、コートや審判が必要だと継続が困難である。

そのような中、ユニバーサルスポーツとして愛好者が増えつつある種目のボッチャは、それら全てをクリアできる可能性が高いと思いついたという。その後、被災年のうちにボッチャ大会の企画提案をした。能登高校でボッチャ大会開催を考えたが緊急事態が継続しており9月には豪雨災害も起き、ライフライン確保が最大の課題で、スポーツをして皆で楽しむタイミングではないと断念した。当時の状況を振り返り、山口氏は現地での経験、情報収集、人脈に課題があったと考えたという。同年内にd4g ボ部の部員が個人的に能登訪問し、民間ボランティア団体(JOCA、OJ)や任意ボランティア団体(チームG)との関係を構築し、情報収集するなかで、被災地の状況が徐々に変わりつつあることを知る。そこで当初提案し

たスポーツ企画へのニーズが生まれ、能登町であれば現地団体の全面サポートが期待できると判断し企画をリスタートさせた。2025年3月末、d4g ボ部は初の能登ツアーを敢行することとなる。ボッチャ体験会実施を主目的として、現地の民間ボランティア団体等の拠点を中心に輪島市、能登市、珠洲市の各地を視察した。その際、トライアルとして鶴川団地（能登町で初めての仮設住宅）でボッチャ体験会を初開催した。山口氏の報告では「20名ほどの参加者があり盛況であった。」として、その際の取り組みから下記のような気づきがあったという。

- ・やはり運動不足は深刻であった。震災前はゲートボール等を実施していた。今は場所が無い。
- ・集会所はあるが、ただ話すだけでつまらない。マンネリ感。
- ・高齢者が多い。ボッチャだと子供とも同等に勝負できて楽しい。

この取り組みの成果としてボッチャを実施することにより、運動不足解消だけではなく、コミュニティ活性化の効果が期待できることがわかった。この分析に基づき、さらなる課題への挑戦意欲が表出することとなった。

- ・能登町の全ての仮設住宅を回って、ボッチャ体験を広めよう。（10か所で実施。能登町の16の仮設住宅エリアのうち「1世帯のみ」の2か所を除く14か所を対象に10会場を集会所や公民館などからJOCAの協力を得て設定）
- ・仮設住宅対抗戦をやったら、更なる目標が出来て動機づけとなる（能登町ボッチャ大会を実施）
- ・仮設住宅内だけでなく、各仮設住宅の居住者同士のコミュニケーションに繋がる。
- ・現地生活支援を受託しているJOCAが「秋の運動会」を企画していた。

以上のような経緯から、今回の能登ボッチャ大会開催が決定した。さらに共催のJOCAから、「大会は仮設住民だけに限らずオープンに参加者を募集し、地域住民全体の大会にすることが望ましい」という助言から参加チームが広がることとなった。



資料 能登町仮設住宅で初のボッチャ体験会の様子

資料 ボッチャ体験会 実施会場と期日

2025 年

7 月 12 日 小木公民館、しあけがおか仮設集会所

7 月 13 日 まつなみ第1 仮設集会所、ふじなみ仮設集会所

8 月 2 日 瑞穂公民館

8 月 3 日 うかわ団地

9 月 13 日 白丸公民館、上町公民館

9 月 14 日 柳田公民館、岩井戸公民館

体験会後は練習を継続できるようボッチャセットを寄贈。許諾を受けた会場ではコート
のラインを表す養生テープを床に貼ったまま残し、競技環境を維持した。

2-2 大会準備

2025 年 10 月 17 日（金）、大会前日は午後から d4g ボ部スタッフによる機材運搬、会場設
営などの準備にあてられた。現地、OJ の拠点から会場で使用する炊き出し用テーブル、選
手用テーブルなどを運搬、別団体から提供頂く配布用のペットボトル、食料品、備品を受け
取りに移動する。地元団体との協働は欠かせない作業であり、同じ目的と想いを抱く同志と
して心強い。

16:00 には、大会会場を提供頂いた柳田小学校を訪問、教職員の皆さんに挨拶の後、体
育館の使用手順など教示される。その後、翌日のセッティングを開始する。新しい木造の建
築ときれいなフロアを持つ施設を借用し、学外者が多数来校するイベントのため床や壁の損
傷が無いよう細心の配慮をして養生を行う。グリーンの養生シートを敷き詰める作業は数名
の人員を要し、かつ慣れないこともあり気苦労が絶えない。しかし、翌日の参加者の笑顔と
歓声のためやれることは全てやりつくすという「イベント開催のプロフェッショナル魂」に
火が着く。既に綿密に計画された会場図をもとに試合用コート4面と公式試合のサイズを体
験できるオフィシャルコート1面（普段の練習場所では公式コートの広さが確保できないこ
とが多いため今大会のコートは「大会オリジナル」の少し小さめのサイズであった）、ライ
ンテープを用いて作り上げる作業である。実際のフロアの広さにより、予定とは設置方向が
異なるコート設定となった。百戦錬磨のボランティア戦士角田氏の言葉を借りれば「計画は
綿密、周到に。しかし、現地ではそれをすべて忘れて現場に合わせる」ごとく、臨機応変で
迅速な決断と対応はさすが d4g ボ部である。養生シートを設置した後には、体育館倉庫よ
り 80 客に及ぶパイプ椅子と長机を設置する。チーム席、観客席、受付エリア、実況席など
会場の概観がほぼ整っていった。その際、OJ から借用したアウトドア用テーブルは被災時
に使用するため若干の汚れが目立つものがあった。スタッフ用要項には「借用テーブル、徹

底的に拭く」の一言が添えられていた。ここにも施設を快く貸し出してくれた地元への細心の配慮が伺える。ステージ上には、大型スクリーンが設置され会場内での各案内（協賛者紹介、試合組み合わせ、進行表など）が提示され広い会場内でも速やかな情報共有が出来る工夫がなされていた。屋外は既に日没を過ぎ暗がりとなっていた18:00過ぎ、トイレ、控室、駐車場案内など屋内外のサイネージの設置が行われた。肝心のポッチャセットの確認、救急箱、AED 設置場所確認、外履き靴用の袋、ゴミ袋などの確認も周到に行われた。競技と同様の重要度をもつ（角田氏いわく）「飲食可能エリア」の準備も同時に進められていたが飲食を教育施設で実施することはハードルが高いようであった。しかし、多くの参加者と地元の皆さん、運営スタッフが分け隔てなく一緒に「テーブルを囲める」唯一の時間を充実したものとするために度重なる交渉がなされたことは想像に難くない。飲食可能エリアは体育館脇の外スペースを利用して設定された。館内フロアからはサブエントランスを利用して往来できる。ここにおいても主催側は、参加者の利便性や高齢者への配慮から、ブルーシートなどを敷き詰めて、室内シューズで出入りが可能な設定を施した。先述のスタッフ用要項には



資料 大会告知資料



資料 大会優勝トロフィー



資料 d4g スタッフによる準備



資料 会場作り



資料 会場全景（ステージ上の本部より）

各スタッフの役割分担の記載がある。秀逸なのはアートディレクターという役職の存在である。告知用チラシ、ポスター、賞状に至るまで制作を手掛けており見事な優勝トロフィーも素晴らしい出来栄であった。21:00には準備を終え宿舎に戻り、後発組が合流し、前日入りスタッフが勢揃いしたのは22:00過ぎとなった。筆者たちは後発組にてd4gボ部ほかスタッフの皆さん20名ほどと顔合わせ、最終ミーティングに加わった。参考までに、筆者の役割は「盛り上げ」と開会式に実施される参加者全員参加のアイスブレイクの担当であった。互いに初顔合わせとなる高齢者の皆さん、スタッフの皆さんが競技においてプレッシャーをパワーに変えてプレーを楽しめることを念頭に置いた。さらには参加者同士の交流が促進するための契機となるような、笑顔に満ちた雰囲気作りを心がけた。翌日は早朝からの最終準備とあって早々に就寝となった。

2-3 大会当日

10月18日土曜日大会当日。能登町の山間部に位置する宿舎を早朝に出発して、会場の柳田小学校に向かう。山々は緑に覆われ朝もやの中、所々に紅葉が見られる。しかしながら、山沿いに流れる溪流に土砂崩れの後が目立ち、被災からの完全復興にはまだ時間を要することが想像される。7:00には小高い丘の上に位置する小学校に到着。9:00開始の大会に向け、さっそく会場設営に合流する。多くのボランティアスタッフの皆さんが各所で忙しく準備に奔走している。体育館脇の飲食可能エリアにもテント設営、テーブル設置、配膳テーブル、食卓などが設置される。午後からは雨の予報があり、雨天時の対応も考慮しながら設営をすることとなった。

8:15には、設営等の会場準備が整いスタッフが一堂に会して全体ミーティングを実施。大会委員長の山口氏から挨拶があり自己紹介を行う。いよいよ各分担の担当者が集まり運営が始まる。審判委員長も兼任する山口氏は、地元高校に通う生徒たち、神奈川から支援に訪れた中学生、青学の大学生、7月の体験会にも訪れているベテラン支援者など、審判担当の皆さんを集めて打ち合わせを実施した。今回のボッチャ大会において審判はルールの運用に留まらず、各チームや参加者を励まし、盛り上げるといった大事な役割を担う。受付、誘導の担当者は、受付が始まる8:30を待たず会場を訪れる参加者の対応に追われることとなる。スタッフ皆で、地元の参加者の皆さんを心からの笑顔で迎える。車いすを利用される方、杖をつきながらゆっくりと入場される方、貸切マイクロバス（石川県の協力により実現）にてチームで来場される皆さんと各々の想いを抱きながら会場を訪れている。受付を通過して、会場に入るとチームごとに割り当てられたシートが名板と共に準備されている。開場後まもなく、当初設置したチームシートのスペースでは手狭な状況であることがわかり、すかさず運営統括から指示が飛び、パイプ椅子一脚ずつ間隔調整を行う。やる気満々の参加者の皆さん

んは、チームシートに荷物を置くや否やコートに入り投球練習を始める。その一投、一投を全員で見つめ一喜一憂する。既に戦いが始まっているのであった。筆者（高齢者枠）は角田氏の誘いで「ささゆり児童クラブ」に合流した。小学生の少年ふたりと先生、保護者のお母様、ちょんまげ姿の角田氏（高齢者枠、盛り上げ担当）に加え特別ゲストのパラアスリートが長野県松本市から参戦してくれた。角田氏の「サッカーサポ繋がり」で松本山雅サポのブラインドサッカー選手である。

資料 参加チーム一覧

1 TEAM460 B	4 TEAM460 C	7 チームやなぎだ	10 チーム岩井戸
2 ヘンタンク愛好会A	5 ひまわり	8 野田ミックス	11 TEAM460 A
3 ささゆり児童クラブ	6 のっとりん	9 ヘンタンク愛好会B	12 野田キャンディーズ



資料 飲食可能エリア設営



資料 審判スタッフ打ち合わせ（事前確認、測定法確認）



資料 来場者受付

全 12 チームが揃い、9:00 に開会式が始まる。能登町のゆるキャラ「のっとりん」登場にあわせて、石川テレビ、地方新聞各社のカメラ、取材陣が会場にて取材を開始。開会宣言、主催者挨拶、ルール説明、チーム紹介と徐々に大会に向けた盛り上がり会場を満たしていく。12 チームのリーグ分け、試合スケジュールが発表される。9:45 には 1 回戦が始まった。各コートで起こる歓声、どよめきが会場に響く。各チームシートには応援用スティックバルーンが配布され声援に加え、打突音が盛り上げを増し、さらに応援に熱が入る。

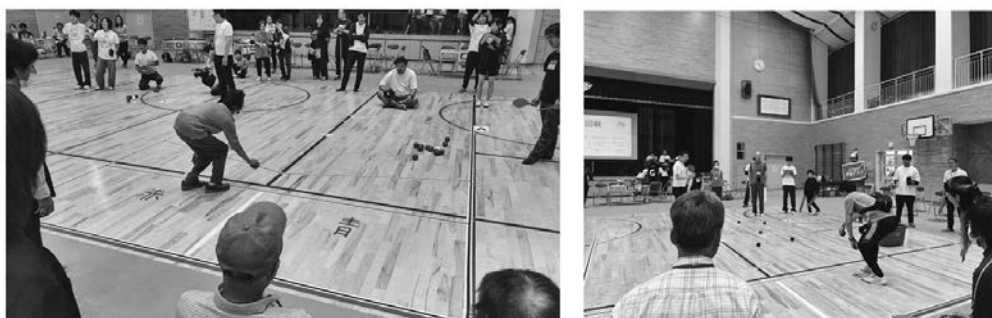
同時時間帯で、近隣の柳田公民館にて、ランチタイムに向けた飲食提供の準備が始まる。奥

能登の被災地支援に、同じ被災を経験した東北の山形と仙台から「芋煮」を提供する企画である。現地から食材を持ち寄り、前の晩からの下準備が行われていた。

「ささゆり児童クラブ」も、いよいよ初戦を迎えた。対戦は「ベタンク愛好会 A」とベタンクで鍛えた投球技術が群を抜いてハイレベルであった。いずれも高齢の先輩達であったが投球の精度に脱帽状態で惨敗を喫した。ポッチャは、ほぼ初体験の我がチームは新鮮な驚きと、相手チームへの賞賛、感動すら覚えた対戦となった。第2戦の「TEAM460（しろまる）B」とは、接戦の末、児童クラブ先生の一投で勝利を収める。好プレーにも珍プレーにも笑いと歓声が絶えず、「得点よりも、楽しんだ方が勝ち」と少年のお母さんがコメントしたように、角田氏も「ポッチャを知って5年くらいですが、『楽しい』って思えました。」と感想を伝えてくれた。予選リーグを終了し、上位4チームを残し一息つくタイミングとなった。

飲食可能エリアでは、運営ボランティアを労うためのデザート提供が始まった。地元発信ボランティア団体の若手スタッフがご家族で担当、小学生の4名によりデザートを提供してくれた。参加者は勿論のこと運営スタッフも朝から準備、試合に追われやや疲労感が増してくる時間帯に、子供たちの元気な声と笑顔と共にデザートが振舞われた。飲食可能エリアを訪れた皆さんは笑顔と感謝の言葉を子供たちに返し、美味しくデザートを楽しんだ。次世代を担う子供たちが、高齢者の皆さんや遠方から駆け付けたボランティアと交流する機会は貴重な学びに繋がる有意義な時間であったと感じる。

準決勝、決勝戦は会場全体が応援ムードを盛り上げ、参加者も一投に気合いが注がれた。対戦後には成績発表と表彰式が執り行われた。余興として能登町音頭、札取りゲームが実施された。



資料 試合の様子



資料 試合（得点確認）



資料 ボランティアスタッフの大学生



資料 大会運営



資料 運営ボランティアの地元高校生

その後、芋煮提供開始のアナウンスがあり競技終了チームから、順々にテーブルに着き競技を振り返り、互いの健闘を讃え合い、同席したスタッフに感謝の言葉が伝えられた。食事を囲むテーブルでは、気軽に言葉をかけ合い、喜怒哀楽も素直に表現されるひと時が訪れるものである。この際に、たまたま角田氏と同席したチームの高齢者から感謝の言葉をかけられたという。震災と津波で家が流され仮設住宅に暮らす日々で涙を流すこともある。今日は遠くから大会を開催するために来てくれた多くの人と会えて、話が出来て、元気がもらえたとのことであった。ご本人から許可を頂き動画にそのお話の様子を取めた角田氏は運営スタッフに共有し感謝の言葉を伝えていた。さらに多くの人が食事を囲み、集まる炊き出しエリアの様子を見て「ささゆり児童クラブ」の少年が角田氏とちょんまげコンビを組んで十八番の「マツケンサンバ」を披露してくれた。後日、同席していたお母様、先生からも少年は参加者の皆さんを笑顔にしたかったのだろう、とても嬉しそうだったと喜びの言葉を頂いた。

美味しい芋煮を残さず完食、フードロスゼロを合言葉に楽しく食べ続け、話し続け13:00頃には大会終了でお別れの時間を迎えた。仮設住宅で過ごす日常とは違った新たな出会い、心も身体も動かして刺激あるひと時を過ごしてもらえたのではないだろうか。運営に関わったスタッフには疲れと充実感が混在する表情が見て取れた。

その後は総力を結集して、会場のあと片付け、清掃、借用品の返却等を分担して実施した。互いに労をねぎらい、別れの言葉を告げ会場を後にしたのは14:00近かった。それぞれの車両が動き始めると同時に雨足が強まり、やがて豪雨が訪れることとなった。奇跡を見るような閉幕となった。



資料 芋煮の準備



資料 ボランティアによる鍋料理



資料 飲食可能エリアの賑わい



資料 食事を一緒にとりながらパフォーマンス

2-4 大会を終えて

本項では、大会終了後にスタッフ間のSNSでのやり取り、参加者のアンケート回答などにより収集した取り組みに関する成果や課題について考察を加える。運営の中核として企画、運営に携わった山口氏と数多くの被災地支援で実働する角田氏、他スタッフのやり取りを参照する。

角田氏

「お疲れ様でした。障がいのあるみんなで一勝できたことは最高の思い出です。ボッチャを知って5年くらいですが『楽しい』と思えました。参加者のご婦人が、津波で家を無くしたこと、芋煮を食べながら話してくれました。皆さんにとっても感謝していた。『みんなに伝

えたいので、動画撮ってよいですか?』と許可得て撮影しました。」

山口氏

「つんさん、今回ご縁を頂いて一緒にイベントができて、とても助かりました!そして楽しかった!僕らスタッフも、参加者もみんな盛り上げてくれてありがとうございます。そして動画、ぐっときました。」

山口氏

「僕らイベントや広告の仕事は、ファンやお客様に喜んでもらう仕事なんだけど、やっている僕らが直接感謝されることは少ないです。なのでこういうお話を聞いたり、直接御礼を言われるのはとても新鮮で、貴重だなと思います。」

角田氏

「今回日本で、もっとも忙しいだろう企業の皆さんが毎日のようにミーティングをし、調整し、僕なら無理だな～と思うことを成し遂げる姿を見て、シニアや、学生じゃなくても、自主自営のボランティアができる!すごく勉強になりました。ありがとうございます」

参加者コメント(角田氏収録動画より)

「私ら災害にあって、仮設住宅に居るのですが。ここにいる皆さんと、テレビを見たり、お話ししたりするのですが、今日はここへ来ていろんな人と会って元気をいっぱいもらいました。また帰って元気になって、頑張ります。(何か思い出したように、少し涙ぐみながら)暮らしていると涙が出ます。これまで生きて、一生懸命働いて、お買い物して、勤めに働いて、私ら友達と一緒に、こういうの食事会をして、いちるま(ひととき)でした。嬉しいです。涙が出ます。」

d4g スタッフ

「山口部長も最初はボランティアといえば、会社を卒業した方≡シニアが取り組むものと思っていたのですが、『意外と現役社員にもボランティアしている人がいるじゃないか!だったらそれを繋げようサポートしよう』という思いで立ち上げられたのがd4g 本部なのでした。もちろん現役でボランティアをやっている人(≡ネジ飛んでる人?)は、そこまでいないのが現実ですが、それはあたりまえですし、普通の趣味や旅行より面白いボランティアが作れたらいいなあなどと思っています。」

d4g スタッフ

「素敵な動画をありがとうございます。嬉しい機会になったということですね。お食事で

おしゃべりなども、はずむ機会になったのだと思います。児童クラブの少年の歌もダンスもよかったですね！一緒に盛り上がった、みんなが元気になる歌とダンスでした！いい時間をありがとうございました」

d4g スタッフ

「普段味わいにくい『よい緊張感』を味わって頂くことで能登の皆さんにとって良い刺激になれば、と思いました。『大会』を行うことで、スポーツ競技に勝ちたいというモチベーションが生まれ、チームで集まり自主練習するなど、良い循環が出来ている（大会後、早くも次回大会に向けて練習を開始したチームもあるとのこと）」

筆者と角田氏が合流したチームの先生とお母様のやり取りを参照した。障がいのある少年と角田氏の交流は、この大会に訪れた多くの参加者、関係者に対して少年が「何かをしてあげたい」と思いを巡らせる機会となったようである。心が動き、行動をする機会となったこと近隣の皆さんと知り合えて活動を共に出来たことは大きな成果であったと保護者のお母様も感じてくれたようである。

児童クラブ お母様

「見守りたいと思っています。自分の意思を伝えられる人がひとりでも多く息子の近くに来てくれたらいいなと。ひとりの時に災害などがあつたら、あの家に息子がいるかとも思い出してくれる人が一人でも多くいてくれたら助かるなと思っています。びっくりしたのは、コミュニケーションが取りにくいと思っていた息子が楽しそうで嬉しそうだったこと。観ている人たちも笑顔の人がたくさんで私も嬉しかったです。」

児童クラブ 先生

「昨年、今年と子供たちもちらっとボッチャを体験していきまして、私もその時にちょっと参加させてもらったりしていました。あんなにうまくいくと思っていてもなくて（笑）勝敗があるとはいえ、とにかく笑って楽しんだら勝ちです。だから来ていたみんなの大勝利でしたね！子供たちもツンさん（角田氏）と一緒に、みんなを笑顔にしたかったんでしょうね、お食事の皆さんに披露できて、帰り道は嬉しそうでしたよ！」

任意団体として被災地支援に訪れているチームGの二人と角田氏のサッカーサポ繋がりです。スタッフ参加した山形サポの中沢さんから、大会に対する感想、実際に交流のあった参加者とのやり取りを参照する。

チーム G ぐっさん

「ツンさんの動画のお婆ちゃん、『神奈川にはこんなにいい男がおるね?』と言ってくれたご婦人です。ボランティアに入って仏壇を出したり、家財搬出したことを話すと『本当に感謝しています』と。でも、本当はいつもこちらが力をもらって帰ります。あんなに頑張っている人に、頑張ってるなんておこがましくて言えないです。被災した人の方が何十倍も強い。なので、毎回の『また来るね』でお別れします。」

「能登町ボッチャ大会で審判他の協力をさせてもらいました。被災地で、こんな笑顔を見たのは初めてかも。ハイタッチして『興奮しすぎたら血圧上がるよ、でも勝負だから勝ちに行こう!』などと励ましながら、ボッチャ大会を盛り上げることができたのかな。

本当にいつ行ってもパワーを頂く。いろんな人と会えて、いろんな話をして、いつも感動、いつも発見。今回、いろんなご縁で関わることができたイベント。特に、大手広告代理店のボランティア部（通称ボ部）の主力スタッフには感謝、感謝。お疲れ様でした。せっかくなので、ボッチャ全国大会を是非能登で。」

チーム G 亀田さん

「柳田小学校体育館でボッチャ大会。お年寄りだけでなく、若者も障がい者も一緒になって楽しめる良い大会でした。能登町のあちこちからお越しくださり、100名超の大会に。

能登町のゆるキャラのっとりんも来てくれました。そして山形芋煮と仙台風芋煮のお振舞い。食事コーナーの設営と、能登町や珠洲の方に混じって給仕のお手伝い。里芋と玉こんにゃくは本場山形産。お米は採れたて能登のひゃくまん穀！昼近くから雨予報だったのを吹き飛ばす晴れ男パワー炸裂。テントを仕舞ったら大雨になりました。」

山形の中沢さん

「土曜日は、能登町立柳田小学校の体育館で、能登町にお住いの皆さんを対象にボッチャ大会が開催されました。柳田地区や珠洲市の民間ボランティア団体ストランダーの皆さんと一緒に、飲食提供のお手伝いをさせていただき、山形・仙台芋煮と羽咋市の農家さん提供の新米『ひゃくまん穀』を召し上げて頂きました。今回の開催には、d4g ボ部の皆さん、チーム G、青山学院大学の皆さんのご協力もあり、とても温かくにぎやかな時間になりました。震災から間もなく1年10か月。支援の形が少しずつ変わってきていますが、建物や道路の復旧はまだまだです。柳田にドラッグストアが開店したばかり。能登以外にも被災地は多くありますが、能登の支援もまだまだ必要であることを、多くの方に知っていただき、引き続きご支援頂けたらと思います。」

青山学院大学から角田氏の講義を通して、被災地支援に興味を抱き初めて活動にスタッフとして参加した大学生から、スタッフ LINE に送られた感謝のメッセージを参照する。

大学生 山本さん

「ボッチャ大会ボランティアにお誘いいただき、ありがとうございました！

被災地を訪れて活動するのは初めてで、不安もありましたが、皆さんや参加者の方々が本当に素敵で、とても楽しく、貴重な思い出になりました。実際に行ってみて初めて分かることも多く、ボランティアを通して、自分が与える以上に何倍も何十倍ものエネルギーや笑顔をいただけたなと感じています。今回はあまりお力になれなかったかもしれませんが、次にこのような機会があったときは、もっとお役に立てるよう頑張りたいです！

この経験も、これからの人生にしっかり活かしていきたいと思います。そしてまた機会があれば、ぜひお誘いいただけると嬉しいです！」



資料 掲載記事（読売新聞石川版 2025 年 10 月 19 日）

競技だけではなくボランティアによって実現した「芋煮食べくらべ」による食事会で参加チーム、ボランティアの運営者、サポートの小中学生、地元自治体の職員が交流を深めたことは大いなる成果であった。次なる段階はこの大会の「継続」にあり、そのための人材育成を体験会、大会の企画、運営で同時に実践するメソッドが必須の課題となる。

角田氏

『炊出しは単なる食の提供に非らず』2011 年東日本大震災での学びを今も継続している。災害は建物だけでなく、ご近所付き合いやコミュニティを奪ってしまう。スポーツと人の繋がりを提供する契機としウェルビーイング・コミュニティの創生にも有用となる。

「ボランティアスタッフに感じて欲しいのは『楽しむこと』、『感謝されることの喜び』であり、それが誰に指示されなくても『また来たい』につながる。みんなに持ち場や責任を分

担して『達成感』を持ち帰るよう最大限の配慮と努力をしたい。」

「被災地支援、共生社会のあるべき姿、目指すべきところ。被災地と共生って別次元に感じる人も多いと思いますが根っこは一緒です。」

『日常』『普通』を奪われた世界が被災地。国籍や年齢、考え方の違う人が敵対したり、無視するのではなく、『違っていいんだよね』と他者を認め合い。そこにその人がいても、違和感がない。『日常』『普通』になることが共に生きるということだと思います。簡単ではありません。でもゴールは空気のような存在になる。理想は助け合うと先人はいうと思いますが、僕は少し違います！全て人と手つなぐこと、理解することは『疲れます』『大変です』理解しあえなくても、助け合えなくても・邪魔をしない、尊重しあう、そこらへんをゴールにすると息苦しくない感じが僕はします。」

3 d4g ボランティア部の活動

企画を主催した「d4g ボランティア部」（d4g ボ部）は、「dentsu for good」を母体とした自主活動が周囲の賛同を得て、名称や活動方針、対象者等を整え、2023年にこの活動を発足したという。主宰している山口氏のインタビュー及び提供資料より、その「部活動」について考察する。

「能登町ボッチャ大会」は、被災当初の2024年1月から奥能登地域への支援を実践、企画していたd4gボ部にとっては長期的視野に立った念願の企画といえる。また、d4gボ部無くしてはここまでの盛況と成功という成果をもたらすことは困難であったと評価する。民間ボランティア団体や任意団体による主体とは異なった組織作りをしており、かつ後述する「企業ボランティア」の目指す企業名、CSR活動を前面に押し出した社会貢献活動とも一線を画している。部員の自主性と「役に立ちたい、貢献したい」といった熱い想いが主体となり、グループ企業所属社員ならではの一体感と専門性を備えた組織作りをしている。

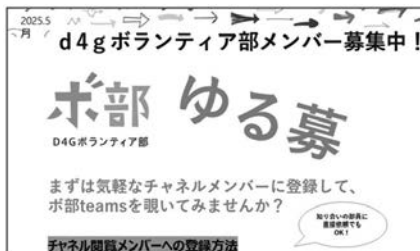
山口氏は「Social Goodな活動」とd4gボ部の目的を表現している。そして、参加する部員を募る際にも「ゆる募」として、あくまでも自主性と無理なく継続、断続が出来る環境を提供しようとする配慮が感じられる。当初は社員やOBたちの「Social Goodな活動」を共有する情報発信源と交流プラットフォームとして発足している。募集資料では「仲間がやっているなら、自分もやってみたい。仲間がやっているから、安心できる。そんなオープンな『部活動』を目指す」と、その活動の方向性を提示し、「会社の業務ではなく、会社の仲間が個人の『Social Good』で繋がっていき、たくさんの小さな一歩が生まれる。」など、同様の想いを持つ仲間たちを増やしていく努力を継続している。また、紹介資料には部が考える「Social Good」として、ボランティアの定義である「報酬を目的としないで、自発的な意志

に基づき他人や社会に貢献する行為であり、現業とは別に地域や社会のために時間や労力、知識、技能などを提供する活動」を引用し、そのような活動に携わっている人だけではなく、興味関心を持っている人、何かしら行動してみたい人、応援したい人すべてが「Social Good」だと包括的なコミュニティを提示している。

大会に参加した高齢者からのメッセージ映像の感謝の言葉に対して「僕らのイベントや広告の仕事は、ファンやお客様に喜んで頂く仕事なのですが、やっている僕らが直接感謝されることは少ないです。ですからこういうお話を聞いたり、直接お礼を言われるのはとても新鮮で、貴重だな、と思います。」と、活動への強い動機となることを示した。さらに、「最初はボランティアといえば会社を卒業した方、シニアが取り組むものと思っていたのですが、意外と現役社員にもボランティアしている人がいることに気づき、『それならば、皆を繋げよう、サポートしよう』という思いで立ち上げられたのがボ部なのでした。」と発足の経緯を説明している。活動を共にする若手部員も、「もちろん現役でボランティアを、やっている人（ネジ飛んでいる人？）が、そこまではいないのが現実です。それは当たり前ですし、普通の趣味や旅行より面白いボランティアが作れたら、良いなあなどと思っています。」とその主旨に賛同し、更に発展させたいという意気込みを表してくれた。そこには顧客のニーズを繋ぎ、互いのメリットを精査し、収益を追求する企業命題とは別次元の活動に自らの専門性と努力を注ぎ込むという、利他性に満ちた目的達成意欲が随所で観察される。

山口氏からは、能登にて開催した大会の多くの成果を受け、今年度後半への課題と抱負を下記のように計画していると明かした。「今後も、まだまだ仲間を増やしたい。みんなの活動をもっと紹介して、交流を増やしたい。」とし、具体的には

- ・「PechaKucha ミニ」（オンライン開催のショートタイム報告セッション）を継続しつつ、対面で実施するイベントも実施したい。
- ・d4g ボ部として、自主ボランティア活動を拡大したい。（能登でボッチャ体験会など）
- ・公式サイトや情報共有ツール、メールマガジン発行などを整備して情報発信や交流を広げ、深める。
- ・他企業のボランティア部やボランティア活動団体とも交流したい。



資料 d4g ボランティア部の活動



資料 d4g ボランティア部が参画した社内イベント
2024年

電通グループでは、2016年から「3月11日はつながる日」として東日本大震災から学んだことを、次の社会に生かしていく取り組みが継続されている。2024年3月4日（月）～8日（金）「つながる week」では、能登半島地震の被災状況の共有と支援活動を目的としたプログラムも行われ、d4g ボ部では、電通ホールにて被災地から救い出された輪島塗の支援販売、情報共有プレゼンテーション「PechaKucha ミニ」などの企画が行われた。この企画では「いま、自分は何ができるか」と題して、能登高校魅力化プロジェクトコーディネーター木村氏の講演と意見交換が行われ能登でのスポーツ（ポッチャ）大会開催の可能性についても言及した。



資料 d4g ボランティア部が参画した社内イベント 2025年



資料 輪島塗販売の様子



資料 d4g ボ部による災害対応ボランティア

2025年は多数のプロジェクトが企画、実施された。d4g ボ部は、輪島塗支援販売にて販売ボランティアの募集と運営、のと千里浜道の駅の出張販売誘致と販売支援、のと鉄道写真

展企画、献血・ドナー登録会開催、つながるスナックの運営を実施している。また、「ボランティア人とつながる / ちょんまげ隊長ツンさんと話そう」では、今回のポッチャ大会ではチームに所属し競技参加、飲食提供コーディネートと大活躍の角田氏が講演している。まさに「つながる日」により繋がることとなる支援の輪であった。

4 共生社会形成とスポーツの果たす役割についての先行研究

スポーツによる被災地支援におけるボランティア活動を扱った近年の文献を参照する。ボランティア活動において「参加者の自主性と無償の奉仕」といった定義は文献内に頻出する。今回の活動を主催した d4g ボ部という組織体は、主体となる企業があり組織を形成するものの活動の意志、動機は個人に帰するという「部活動」という形態に特徴を持つ。また、ちょんまげ隊のツンさん（角田氏）やチーム G 代表（ぐっさん）は、個人の意志を尊重し、機動性の高い小規模組織運営を標榜している。形態や手法は様々であるが目的や到達点が同様の活動である点に共通性が見出される。そこで、本章では企業とボランティア活動の意義について論じている文献を参照し、その後にスポーツとボランティア活動の関連を探り、到達点であるスポーツによる共生社会形成を扱った文献の研究動向を明らかにすることを目的とするものである。

4-1 企業とボランティア活動

小林⁶⁾は、企業とボランティア活動推進の関連を扱った「社員による企業ボランティア参加に関する現状と課題」において、企業の社会的責任（CSR）について論じている。企業は様々な社会貢献活動に取り組むようになり、社会貢献活動プログラムを策定して、社員のボランティア活動への参加支援のため、休暇制度を整備する等の施策を拡充させている。また、ボランティア活動に参加した社員が得た経験を職場で活かすための機会、あるいは人材育成ととらえて、企業研修の中に取り入れる動きも見られる。ここでは企業の経営主体の承認のもと実施される、企業社員参加型のボランティア活動を企業ボランティアとして、その現状と課題について考察している。また、「企業側と社員の利益相反がコンフリクトを生じさせている可能性が示唆された。」という。いっぽう d4g ボ部は、各部員のインセンティブに従い実施するという自然体の「部活動」形態により自律的な組織を形成している。

小林の報告によると、前掲のアンケート調査の回答において、ボランティア活動への参加により「暇な人」というレッテルがはられるといった回答があり、企業側の対応策として企業ボランティアのビジョンを策定、周知を図るといった対応がなされた案件があったという。さらに、「社員が参加する企業ボランティア活動については、あくまでも自発的参加であり

活動は就業時間外で行うべきなのか、あるいは就業時間内でのボランティア活動を許可し、ボランティア休暇の取得権利を設定するなどの方策を実施するなどの対応事例も散見される」として、その対応や位置づけは様々であるという。本研究における対象大会の主催者である d4g ボ部の立ち位置は極めて明確である。いっぽう、「企業体とボランティア活動」の親和性を求めるのは企業側の論理が先行し、活動に参加する社員の動機や事後に獲得される自己実現や自己有能感による充足感等は評価対象として扱われない事例も多々存在する。

植村（2010）は「労働時間を短縮し、個々人がより大きな『自由時間』を手に入れることが出来るようにすること。今までよりも早く退社し、より多くの有給休暇を気兼ねなく享受できるようにすること。それは、私たちが家族や隣近所の人々と親密な時間を過ごし、さらには政治的公共圏に参加し、NGO や NPO に関与しようとする場合にも、その『土台』となるはずのことである」という指摘をしている。あくまでも有意義なボランティア活動を自主性や自由意志により実施することと、企業ボランティアの考え方には隔たりがあるという認識を示している。

宮坂⁹⁾は、企業ボランティアが一般的に認識されるのは 1980 年代のアメリカ事例からであると報告している。その定義として「ボランティアには『無償』以外に『自主性』という概念が含まれる。ボランティアとは金銭的な利益なしに共通善のために『進んで』(willingly) 捧げられる時間である」としており、「『進んで』の代わりに『頼まれもしないのに』(without being asked) という語彙が当てられていることがある。」など、自発的な意思に起因する行為であることを示している。宮坂は、その差異が生じたことを「企業ボランティアがトップダウンで生まれたのかそれともボトムアップでおこなわれるようになったのか」という経緯に関連付けている。「誰がボランティアの内容を決めているのか（会社か、従業員か）、という選択肢も組み込んで分析が提示されている。」として、ボランティア先進国と国内企業の理解の相違を指摘している。

4-2 スポーツと共生社会

金ら⁹⁾は、ボッチャの有用性につて大会参加者のアンケート調査から「知らない人たちとのつながり」を創出することを指摘している。ボッチャの運用について「当該大会は従来の行政サービスとして行われるスポーツ大会とは異なり、行政以外にも市民や大学などの教育機関が連携しユニバーサルスポーツ参画の機会を共創する一つの事例となっていた。」ことから、その有用性について「今後、ユニバーサルスポーツは、行政主導で進められ住民は参加するだけの『スポーツ振興』から、住民も主体的に参画する共創要素を持つ『スポーツ推進』へと昇華する契機を与えている」と、参加者が主体となって活動を起こし、コミュニティ創生に有効な種目として期待を寄せている。

野口¹⁷⁾は、ウェルビーイングは「自分自身が満たされた人生を生きることである」と定義し、「医学モデルの病気や疾病が無いという状態から、快楽心理主義の一時的にポジティブな感情を伴う体験」に至るまで広範な認識を示している。近年の海外文献から数例を参照している。Kahneman（2006）の主観的ウェルビーイングでは「人生の満足度」、「ポジティブな気分」、「ネガティブな気分が無い」という分類手法を用いている。これらを統合しPeters（2017）は、自身の内省的な判断に基づいたものであるとした。野口はこれらの知見に基づき自身の豊かさに留まらず、「地球に生きている私たちは地球そのものや他の生き物と共存しなければならない。したがって、社会で生きていく中では他者のウェルビーイングも達成されなければならない」と俯瞰し、前野（2022）の示した、SDGsを包括するものであるという認識を提唱している。続いて野口は、スポーツによる学びとウェルビーイングについても論じている。「スポーツは自己と向き合い、自己のアイデンティティを確立し、自身の人生をより豊かにしていくものとして価値をもっている。他者は競争相手ではなく、協力し合う相手であり、共通の価値観を共有できる仲間となる。そして仲間たちと形成されたそのコミュニティは、コミュニティ外部の価値観を共有できる者たちとさらにつながる。」と、その価値を定義し個人からコミュニティ、社会への繋がりを形成する役割を果たしていることを論じる。スポーツ活動における様々な課題、不平等を指摘しながらも「人々はスポーツを通じて、自身の生きる都市や社会、自然を感じ、自身のウェルビーイング達成のために、社会や地球のウェルビーイングを考える必要性を体験的に学ぶことができるのかもしれない。」とスポーツの持つ価値を評価している。さらに、野口はスポーツの特性を活かし更なる学びの手段としていくために「体を通して自然や都市を感じることで、自分自身が生きる自然や都市と、どのように共存できるのか、体育（スポーツ）を活用して学ぶことはできないだろうか。」といった課題を掲げる中で、「障がいの有無、性別、出身地などのあらゆる違いにかかわらず、誰もが安心・安全に体育（スポーツ）に参加できる環境を整備すべき」と結んでいる。

今回の能登町ボッチャ大会に至る、経緯から実践活動、参加者の反応、運営者の変容などを観察、評価する中でスポーツを通じたウェルビーイングの獲得が実践され、浸透していく過程を見出すことができた。さらには、このような取り組みをいかに継続し発展させられるかが今後の課題と考える。

5 被災地支援とスポーツを介した組織運営の事例

今回の事業に運営スタッフとして関わり、障がい者アスリートの招聘、飲食提供による食事会の主催を担当した角田氏は東日本震災から14年にわたり被災地復興支援活動を実践し

ている。特徴的なのは自身がサッカー日本代表サポーターとして築き上げた「人の繋がり」を駆使して、サッカーサポーターによる「支援組織作り」と「スポーツによる被災地支援」という活動を継続していることである。2024年1月に発生した地震による、奥能登地域の被災地支援活動においても多くの支援を実施している。

2025年6月には奥能登地域にて、Jリーグサポーターの連携により、日本代表とインドネシア代表のサッカーワールドカップアジア予選のパブリックビューイングを開催した。ここでは奥能登地域で就労するインドネシアの技能実習生を招いて地元住民との交流が図られた。以下、角田氏のSNSの発信情報を引用しながら活動の概要を考察する。

「サッカーのチカラ。この活動はJリーグ浦和サポーターが繋げてくれた奥能登在住の木村聡氏(埼玉から奥能登に移住し地域支援事業を展開)が主催している。松本山雅サポーターがラーメンを提供。柏、仙台、横浜サポーターが東京から飛行機で。金沢サポーターも合流。国旗は能登高生が準備。『共生』をテーマに能登で頑張るインドネシア実習生のためのパブリックビューイングを開催した。能登町で働くインドネシア人61人のうち、約1/3の21名が参加(残りは船上)。試合後深夜のバーベキューに招待された。震災の時に何が大変だったとの問いに『排便とシャワー』とのこと。それでも漁業が好き、家族に仕送りする為、震災前から変わらず日本を支えてくれる。この日に6-0は…それでも『共生』がテーマの最高のビューイングでした。みんなでスポーツをどんどん活用しましょう」

以下は主催者の木村氏からの運営時に感じたイベントの成果と課題を提供頂いた。

「過疎地域でのイベント集客は何度やっても難しく悩ましいです。ましてやコミュニティも異なり言葉も違う外国人を対象とするととなると、難度がグッと上がります。6月10日の『パブリックビューイング@宇出津』では、石川県漁業協同組合能都支所、小木支所、すず支所、日の出大敷(定置網漁の会社)に事前に声がけし、インドネシア人技能実習生たちへの声がけをお願いしていました。それが集客につながったと思います。技能実習生も組合や雇用先の会社・親方から参加しておいでと言われたら出向きやすいですね。喜んでもらえたと感じたのは、

- ・インドネシア技能実習生としては、自国代表を能登にてリアルタイムで応援できた。自国の国家を大声で斉唱できた。会場で能登の人々と交流できたことなど。
- ・漁業組合関係者としては、日頃なかなかインドネシア人に楽しみを提供できない中で、楽しみを提供できたこと。『あんな楽しそうな姿をなかなか見ない』という感想頂きました。
- ・地域住民としては、インドネシア人との交流の機会を得て、話す機会ができた。能登町の漁業を支えている彼らの存在を『姿』として見る事ができた。

彼らが胸に手を当ててインドネシア国家を大声で歌っている姿を見て、かつて自分がW

杯フランス大会予選を国立競技場で観戦していた頃の熱を思い出し、涙が出ました。」

主催者が身近で活動の当事者たちと接することにより感じられた成果が著されていた。課題としてあげたのは「継続」して、このような活動を実践していくことであった。スポーツ観戦においては、共に時間を過ごすボランティア、地元の協力者など対面で交流するスタッフたちがいる。加えて国旗を作った高校生の存在がインドネシアの皆さんに共有されたことは大きな成果といえる。この「機会」が契機となり、スポーツに限らず様々な繋がりが「継続」されていくことは今後の課題である。継続するためには地元含め遠方からも、若年層世代の人材を積極的に活動に「巻き込む」ことが肝要となろう。

また、2011年から支援を続ける宮城県南三陸では2025年10月に東南アジア諸国から訪れている技能実習生たちを対象にした「南三陸ウォーキングフットボール大会アジアカップ」の開催サポートをしている。角田氏は2024年以降、(財)日本サッカー協会(JFA)主催で奥能登エリアを中心にウォーキングフットボールを用いた復興支援活動を実践している。JFAの広報資料では共生社会構築の意義を報告¹³⁾している。なかでも、あらゆる年齢層の地域住民とプレーすることにより「コミュニケーションの活性化」、そこで生じる「高揚感や自己肯定感の獲得」はこの種目とルールならではの成果であろうと指摘している。「人との関り」のなかで実施される活動時の「声掛け、得点時の高揚、他人からの賞賛、自己肯定感の獲得」などは被災地における非日常を提供し、行動変容をもたらす契機となることが示唆された。このような取り組みは、失われた日常の中で困難に向き合うコミュニティにおいてウェルビーイングを促進する活動として有用であると考ええる。「南三陸ウォーキングフットボール大会アジアカップ」では、当初の目的であった地域で働く東南アジアからの技能実習生と地元住民が共にウォーキングフットボールを通じて交流することは諸事情により、叶わなかった。しかし、活動を通して(財)日本サッカー協会(JFA)をはじめとする主催スタッフ、運営をサポートした大学生、地元で暮らす様々な参加者の皆さんとの対話、表情などの行動観察、SNSを利用した発信内容から、共生社会構築に向けた多くの手応えがあった。あらためて、この「ウォーキングフットボール大会アジアカップ」を東南アジアから来た技能実習生に経験して欲しいと実感している。競技の体験による言語、年齢、性別、技術レベルを超えた交流。炊き出しによるランチを共にすること、ハラル食材によるデザート提供でテーブルを共にして互いを知り合うこと。防災講義でのグループワークを地域住民と経験することで緊急時に互いに協力し合う備えを整えること。スポーツを通じて共生社会を達成することが可能であるという確信が芽生えた。このような取り組みが継続されること、次世代につなげていくことが大きな使命である。さらに、この取り組みが共有され、子供たちから大学生年代の教育活動や研究の糧となることを願いたい。

6 青山学院大学のスポーツによる被災地支援活動の取り組みと学び

スポーツによる地域貢献は、人々の主体的かつ自主的な実践が肝要であり、これらの行為はソーシャル・キャピタルを生み出し、スポーツコミュニティへの参加者がその担い手となることを期待している。近年では、2015年に採択された「2030年を目標年次とする持続可能な開発目標（SDGs）」において、“Good health and well-being”が目標の一つとして設定された。健康の獲得とウェルビーイング促進は、両翼として持続可能な目標として期待される。これを受けスポーツ活動を通して対面で交流することの有用性や価値を見出し、ウェルビーイング・コミュニティ創生に向け本学においても社会連携機構を中心とした多くのスポーツ活動^{11,14)}が発足した。

2022年より学院内にて、スポーツによる社会課題への取り組みを継続してきた「オール青山スポーツコミュニティ・プロジェクト^{*1)}」は、その活動を学外に広げ2025年3月に能登半島沖地震被災地復興支援活動を実施した。活動には大学生アスリート、学院内教職員を中心に組織した24名が参加した。なかでもコーディネーターおよびファシリテーターとして、この活動を推進した角田氏の存在は大きかった。3年にわたり学院内で培ってきた「スポーツによる社会課題への取り組み」のスキームを被災地復興支援という形で学外に提供する機会となった。これまで年間に夏冬2回ずつ青山キャンパスと相模原キャンパスにて実施してきた「オール青山キッズスポーツチャレンジ」を被災地の子供たちのスポーツ機会創出のため実施することとなった。これは小学生を対象として保護者も参加可能なマルチスポーツ体験イベントである。青山学院大学のトップアスリートが種目ごとにブースを設定して、参加者が20分から30分ずつスポーツチャレンジする人気企画である。被災地の事前視察と現地自治体、民間ボランティア団体との調整に加え1か月間に及ぶ運営学生、学生アスリートによるオンラインミーティングを重ねる中で、被災地の現状把握、活動の目的、効果的な運営方法の十分な共有が必要とされた。さらに、実施に向けて関わる学生だけではなく所属するクラブや友人、学部の仲間たちにも「被災地の今」を認識してもらい、共に支援する気持ちを共有する「被災地を知る支援」を広げる努力を継続した。現地における活動は3日間と限られており、その時間と資源をいかに有効に活用するかを学生たちと共に思いを馳せる有用な準備期間となった。2025年3月7日（金）～9日（日）に、奥能登地域の輪島市、珠洲市、能登町にてスポーツによる復興および被災地視察、避難所訪問と炊き出しを実施した。運営指導に関わった学生たち14名、教職員及び指導スタッフ10名は各々の役割を果たし被災地復興のために3日間を過ごした。現地で時間を共にした200名を超える参加者、自治体職員、民間ボランティア団体からは多くの笑顔と感謝、励ましの言葉を頂いた。短期

間であり、決して多くの成果を提供したとは言えないが「スポーツによる被災地復興支援活動」により奥能登地域で暮らす皆さんに学生たちの想いを届けることが出来たと実感している。この活動においても、大学生アスリート、運営学生のマネジメント、スポーツアントレプレナーシップに関わる学びを成果として、「継続」が次なるテーマである。そして、更なる教育的効果を応用したアクティブラーニングプログラムの実践は今後の課題となろう。

【青学生のスポーツによる被災地支援活動に対する感想】

- ・被災地支援として働かれている方々に出会い、人との繋がり大切さを再認識しました。
- ・このような支援をライフワークにされている方がいるという点も非常に良い学びでした。人は「助け、助けられることに幸せを感じる」とおっしゃっていた方が印象的でした。
- ・今回の企画をしていなければ絶対に出会えなかった人と出会えたということが1番印象的だった。
- ・被災された方々の雰囲気が思いのほか明るく、厳しい状況を乗り越えていこうとする強い覚悟を感じた。
- ・支援活動に行ったこちらが元気をもらったほどだった。
- ・こんなにも私自身にできること、喜んでもらえることがあるということに驚きました。
- ・小学生が元気にスポーツを行う姿をみて、こちらが元気を頂いた。
- ・実際に生の声を聴けたこと、そして何より個人的に感じたのは被災された方の自宅を案内していただいたこと。ここのキッチンが～、玄関がこうなっていて～、リアルに被災の状況を知ることができた。
- ・グラウンドの上に仮設住宅が設置されている現状を見て、同じフットボールを愛する仲間としてプレーする環境がないということの辛さを感じた。
- ・初めて被災地に行ったため状況を見るだけで普段の自分が当たり前になっていることがそうではないんだと感じた。
- ・自分は1泊2日の参加でしたが、初日に対面で初めて参加していただいた部活動関係者や教職員、スタッフの方々と短い時間の中で交流することができました。また、能登に訪問してからは現地の方や子どもたちの温かさに触れることができました。自分としては何か田舎特有の自分の地元のような感覚もありましたし、災害を経験して自分たちの想いで復興していくという人としての強さを感じました。(岩手県出身の学生)
- ・たくさんの支援団体が活動されていることを知り心強かった。
- ・初めての被災地ボランティアをさせていただきましたが、これを主として活動されている方々がいることとても勉強になりました。ボランティア側の私達の方が勉強になることや地域の方々の温かさ含め力をいただいたような気がします。
- ・4月から社会人となり、その仕事内容が保険を売る側として働きます。能登での経験があっ

たからこそ、保険の知識をきちんと身につけ、地震などの災害によって起こる被害に対して自分にできる貢献を探して行動していきたいです。今回このような機会をいただき、本当にありがとうございました。

- ・ 継続したいことはこの活動そのもの。主催がどこかに拘らず、大学スポーツのヒトモノの資源を利用した復興支援は続けたい、続けてほしい。

※1：2022年度より、学院内体育関連科目教員有志（中等部、高等部、大学）により発足し「学院内をスポーツでつなぐ・地域と学院のスポーツによる連携」を目的に学院内施設で、専門指導者と生徒・学生の運営により活動し、「研究と学びの場」を提供するボトムアッププロジェクトである。同様の主旨にて2024年にはプロジェクトメンバーが主体となり、より広範な活動を目的として一般社団法人オール青山スポーツコミュニティが発足した。

7 まとめ

コミュニティを基盤とした日常において、共生社会の実現に向け対面で交流することは有用な活動と認識されている。なかでも、多様な年齢層において心身の健康を獲得し、少子高齢化社会に備えるスポーツ活動には、これらの取り組みにも親和性を有する。

本研究では被災地の仮設住宅で暮らす高齢者を主な参加者となるユニバーサルスポーツ「ボッチャ」を応用した体験会と競技会（2025年7月～10月）を対象として参加者と主催、運営者が共生社会形成に向け取り組む活動に対して考察した。主催団体である「d4g ボランティア部」（以下、d4g ボ部）は2025年初頭から取り組みを始め、7月からは奥能登地域の仮設住宅や集会所を巡り、合計10か所でコミュニティ創出の「機会」となる体験会を実施し、10月には大会を開催した。運営には地元を拠点とする社団法人、民間ボランティア団体、都内の大学生、地元の小中高生、東北被災地からの支援チームなど多くの支援者がボランティアとして携わった。この「人の繋がり」を基盤に大会全般において共生社会実現のための多くの示唆があった。スポーツ活動の親和性の高さ、「炊き出し」等による食事会を併催することは、より深く、さらに広範なコミュニケーションと繋がりを築くことに有用であることが観察された。

また、d4g ボ部のイベント開催プロフェッショナルならではの「緻密な運営」、イベントの目的達成に向けた「熱い想い」は一般的な企業ボランティアの認識を超えた「組織的な取り組みと個人の自由度」を反映した革新的なボランティア活動の形を表出していた。さらには自治体、行政とは一線を画した任意団体や個人による、迅速かつ的確な支援活動や、地元発の民間ボランティア団体の早期発足等は、今後の復興に大いに貢献することが期待される。

参加した高齢者が語っていた大会開催への感謝の言葉に表現されたように、スポーツが生み出した「共生コミュニティのチカラ」を、いかに「継続」していくかは今後の課題である。

運営スタッフとしてボランティア参加していた地元小中学生、大学生はじめ若い世代が、ここでの学びや想いを引き継ぎ、持続可能な取り組みとしていくことが未来に向けた大きな「チカラ」となることを期待したい。

謝辞

本稿の研究対象となった被災地支援活動の主催者である「d4g ボランティア部（株式会社電通関連企業の有志による組織）」による取材協力、資料提供に謝意を表す。特に創設者でもありボ部にて部長を務められる山口剛氏からは本研究に対して、多くの示唆を頂いたことを報告する。また、活動を支援する社団法人や民間ボランティア団体および個人の皆様からの研究資料提供に重ねて感謝する。

参考文献

- 1) 阿部利江. 災害ボランティア活動を通して福祉や防災を学ぶ：東日本大震災における避難所での支援活動より. 東北福祉大学研究紀要, 2021, 45: 179-201.
- 2) 江田英里佳；巻誠一郎ほか. 災害とスポーツ：大規模災害時におけるスポーツの意義を考える. 身体文化論28：身体運動文化学会第27回大会シンポジウム, 2023, 28.79-92.
- 3) INOUE, Yuhei; HAVARD, Cody T. Sport and disaster relief: A content analysis. Disaster Prevention and Management, 2015, 24.3: 355-368.
- 4) 片岡正教, and 奥田邦晴. ボッチャ：最重度の障がい者アスリートが参加するパラリンピック競技. 日本義肢装具学会誌 32.4 (2016): 253-256.
- 5) 金賢吾, 原田拓真, and 神野賢治. 地方自治体におけるユニバーサルスポーツの推進：富山県魚津市のボッチャ大会を事例に. Diss. University of Toyama, 2024.
- 6) 小林智恵子, 磯部太一, and 武藤香織. 社員による企業ボランティア参加に関する現状と課題. 全労済協会公募委託調査研究報告書 61. 2016: 1-31.
- 7) 小林勉. ソーシャル・キャピタル論から見た地域スポーツの動向. 現代スポーツ評論, 2024, 51: 36-50.
- 8) McDonald-Harker, C., Drolet, J. L., & Colvin, S. The Role of Sport in Building Resilience among Children. The International Journal of Sport and Society, 2021, 12.1: 33.
- 9) 宮坂純一. CSR, 企業市民活動そして企業ボランティア（下）欧米の経験に学ぶ. 社会科学雑誌 19 (2018) : 1-35.
- 10) 宮崎純一. スポーツによるアクティブラーニングプログラム開発～奥能登被災地復興支援活動の事例報告～. 青山経営論集, 2025, 60. 7: 47-65.
- 11) 宮崎純一. スポーツアントレプレナーシップ開発プログラムに向けた実践：スポーツキャリア関連講座の事例考察. 青山経営論集, 2024, 59. 4: 3-17.
- 12) 宮崎純一. Jリーグの社会連携活動とSDGs：「シャレン！」による取り組みの事例報告. 青山経営論集, 2024, 59.3:1-20.
- 13) 宮崎純一. ウェルビーイング・コミュニティ創出におけるスポーツ活動：ウォーキングフットボールを活用した被災地支援の事例より. 青山経営論集, 2024, 59. 別冊 ㉔.
- 14) 宮崎純一. 大学総合型地域スポーツクラブのマネジメント：社会課題解決に果たすスポーツの役割. 青山経営論集, 2023, 58.2: 1, 3-34.
- 15) 中村天江. 労働組合による災害ボランティア. 連合総研レポート DIO 37.8-9 (2024): 22-29.

- 16) 二宮雅也. 共生社会とスポーツボランティア. 日本体育・スポーツ・健康学会予稿集 第72回 (2022). 一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会, 2022.
- 17) 野口亜弥. ウェルビーングに向けた教育－SDGsをスポーツから考える－. 「体育社会学の課題と展望」. 大修館書店. 2025.: 232-244.

- ・スポーツ庁, 第3期スポーツ基本計画,
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413_00001.htm
- ・一般財団法人オール青山スポーツコミュニティ公式サイト <https://all-aoyama-sports-community.com/news/>
- ・特定非営利活動法人国際障害者スポーツ写真連絡協議会 <http://www.paraphoto.org/2006/2008年07月10日「10年かかった、パラリンピック初出場。日本ボッチャ協会常務理事、渡辺美佐子さんインタビュー」>
- ・一般社団法人日本ボッチャ協会 <https://www.japan-boccia.com/about/>

資料 ボッチャの発祥と発展について

ボッチャ起源

「有史以前の人々は石などの物体を投げ、獲物や敵に命中させる技を子どもの頃から身につけたと言われる。自己防衛や食料を確保するなど、生きるためには、物を正確に投げる術を覚えなければならなかった。投動作は、元来戦闘的な行為だった。のちに人間は石を研ぎ、握ったり転がしたりしやすくするために石を丸くするようになった。このようにボール競技に必要な『投げる』、『転がす』という基本的な動作を覚えた。そして、球形の石を転がして標的に近づけ、相手の近い球をぶつけて弾き飛ばすというゲームが発祥し、競技として発展した。このボール競技の原型ができたのは、紀元前10世紀頃と推定されている。古代ギリシャでは、スファエラ（球形の意）と呼ばれる球技がおこなわれ、古代ローマでもカラカラ寺院には、今のボール球技と同じようにボールを投げている人々、ポイントを測定している人のフレスコ画が残されている。さらに中世になるとボール競技があまりにも盛んになり過ぎ、フランス国王シャルル5世は『ボール競技に興じる暇があるなら、弓矢の訓練をして戦時に備えよ』とボール競技の禁止令を出したという。やがて、このボール競技は『ブル』と呼ばれるようになり、一般的にはスボール・ブル（フランス語）、ボッチャ（イタリア語）を意味するが、広義では『ベタンク』、『プロヴァンサル』、『ラッファ』、『ローンボール』などもブルに原型がある競技とされる。」

ボッチャ発祥海外へ“ベタンクの概要・歴史”. fjpb.web.fc2.com.

ベタンクの歴史

「ベタンクは、1910年に南フランスの港町ラ・シオタで生まれたボールスポーツです。プロヴァンサルという助走をつけて投球するゲームが、全員が同じ場所から投球するようになりピエタンケ（「両足を揃える」の意）からベタンクになったと言われています。発祥国フランスでは500万人以上がプレーを楽しんでおり、その内40万人がベタンクのライセンスを持ち様々な大会に参加しています。ベタンクが親しまれる理由は、どこでもほんの少しのスペースで気軽にプレーできるところにあります。ゲームではたった1球で形勢を有利にしたり、大量得点をとったりするところに面白さがありますが、そのためには集中力を必要とし、巧妙な戦略や高度な技術を身に付けなければなりません。思い通りの投球ができたり作戦が的中した時には、この上ない爽快感があるものです。」

公益社団法人日本ベタンク・ブル連盟. 2014年3月11日

国際障害者スポーツ写真連絡協議会 公式サイト2008年7月10日掲載

「10年かかった、パラリンピック初出場。」日本ボッチャ協会常務理事、渡辺美佐子さんインタビュー

協会設立から丸10年目にしてパラリンピックに初出場となる日本ボッチャチーム。団体戦にエン

トリー（4人）、そのうち3人が個人戦に出場する。パラリンピック正式種目の中でも最も重度の脳性麻痺者が行うスポーツだがあまり知られていない。ボッチャの魅力について、日本ボッチャ協会常務理事の渡辺美佐子さん（53）に聞いた。

「古賀稔啓理事長がヨーロッパで開かれた脳性麻痺の人たちの国際大会に出席して、ボッチャ競技を見たこと。古賀理事長は養護学校の教員をしていたので、授業に取り入れようとレクリエーション的に始めた。私が関わったのは1995年、イギリスで開催した国際脳性麻痺者スポーツレクリエーション協会主催の大会。正式な国際ルールで行われており、大会役員は選手を障害者としてではなく、一人前のアスリートとして扱っているのに驚かされた。そこで日本でも国際ルールにのっとったアスリートを育てていこうと、1997年に日本ボッチャ協会を設立した」

「10年かかったという感じ。日本では、まず経済的な問題。脳性麻痺の人のほとんどは仕事につけず、基礎年金で暮らしている。スポーツをやるゆとりもない。人材発掘の難しさもあった。選手は大会に出場した人の中から選ぶといった状況が続いている。また脳性麻痺の人たちはスポーツをやった経験がなかったため、人と競うという意識も薄かった。それをイメージしてもらうのも大変だった」

「脳性麻痺の人たちは生まれつき、体が緊張する。導入するときに、彼らの周辺のケアに関わっている人から『もともと体に緊張のある人に、より緊張させてどうするのか』との反発があった。そのため、『ボッチャをやったために2次障害が出た』と言われなかったためにも、3年間、競技をやっている人のデータを取るなどケア面にかなり力を入れた。いまでは当時の批判があったからこそ、ケアを真剣に考えられたと思っている」

「選手の自立が進んだ。例えば以前なら試合会場には家族や介助者をいっぱい連れて来ていた。経済的な側面もあるのだろうが、今では一人でやって来れるようになった。合宿などでは練習開始の時間だけが伝えられる。選手はそれぞれペースが違うので、自己管理して食事など各自が計画的に行うようになっている。そのほか、日常生活では、本当にやってほしいことが伝わらなかったとしても『これだけやってもらったんだから』とあきらめていた。しかし競技では、100%伝えなかったら負ける。伝えられなかった結果が目に見えて出てくる。そんな中で鍛えられて、自分の意志を簡潔明瞭に伝えられるようになっていた」

「ボッチャ発祥の地のポルトガル選手は月曜から金曜まで練習して、月に1回は合宿している。日本では考えられない。だが、ボッチャは技術や体力だけでは決まらない。戦略などの頭脳面が大きな役割を果たす。都内の2選手には特にメンタル面の訓練を積んできた。科学的な手法も取り入れ、選手固有の投げる時のバランスを分析し、3年かけてその人固有のフォームを完成させてきた。一人ひとりが力を出しければメダルも夢ではない」

「ボッチャは障害者も健常者もハンディなく一緒にできるスポーツ。健常者が勝つとは限らない。実際に体験してもらうのが一番。協会ではアスリート育成と同時に、裾野を広げるため、レクリエーションとしてのボッチャの講習会にも取り組んでいる。また、選手たちは地域にボッチャを普及する役目も担っている。もし、近くのスポーツセンターなどで選手が練習していたら、気軽に声をかけてほしい。選手たちは気持ちよく応じてくれる」